

戦前の出版検閲を語る資料展

浮かび上がる 検閲の実態

会期
2018年1月10日(水)
～2月3日(土)

会場
東京古書会館
2階 情報コーナー
月～土 10:00～17:00(日曜・祝日休館)

主催：神田古書店連盟・千代田図書館
協力：東京都古書籍商業協同組合
(東京古書組合)
小林昌樹氏
(千代田図書館「内務省委託本」研究会)

●関連講演会
浮かび上がる警保局図書課

日時：2018年2月3日(土) 14:00～15:30
講師：安野一之氏
(千代田図書館「内務省委託本」研究会)
会場：東京古書会館 7階 会議室
(事前申込制、参加無料)

戦前期の日本では、中央官庁の一つであった内務省が出版物の検閲をおこなっており、新聞・雑誌・書籍などの納本が義務づけられていました。しかし、検閲業務で実際に用いられた原本はさまざまな事情により散逸したため、現在確認できるものは、そのごく一部だといわれています。残存する記録が少ないため不明な点が多い出版検閲ですが、現存する検閲原本や内務省の内部文書などから、検閲体制下における出版事情をうかがうことができます。

また、戦時色が濃くなると国家総動員法による物価統制の影響が古書にも及び、「公定価格表」が作られました。当時の出版物は検閲以外にも、発行前には企画内容の審査、用紙の割当て、発行後には二次流通(古本)の価格に至るまで統制が行われたのでした。

昭和初期の出版検閲についてパネルで解説するとともに、千代田図書館蔵「内務省委託本」ならびに、東京古書組合蔵「公定価格関係資料」など、検閲や出版物統制の実態を今に伝える貴重な本や資料を展示します。

※2011年に千代田図書館で開催された同名の企画展示と概ね同じ内容です。

展示関連講演会のお知らせ

浮かび上がる警保局図書課

内務省警保局図書課は戦前の出版検閲を担った組織です。明治26(1893)年に発足し、昭和15(1940)年には警保局検閲課(情報局第4部第1課と兼務)と名称を変え、終戦まで存在しました。近年、出版検閲に関する研究は盛んになってきており、文学作品を中心に、どのような検閲を行われていたのかという研究はかなり進んできました。しかし、警保局図書課そのものに関する研究はあまり進んでいません。理由としては、図書課に関する情報が断片的で全体像が描きにくいこと。図書課に居た人々が戦後、回顧談等をほとんど残していないことなどが挙げられます。

本講演では、これまでに得られた断片的な情報を時系列に沿って整理し、制度や業務がどのように変遷したのか、また、課内の職階や検閲官の人数の変化・キャリアパスの分析などを通して警保局図書課がどのような職場だったのかをお話しします。

日時 2018年2月3日(土) 14:00~15:30(13:30開場)

講師 安野一之氏(千代田図書館「内務省委託本」研究会)

会場 東京古書会館 7階 会議室

定員 80人(事前申込制、参加無料、先着順)

申込方法 ①電話:千代田図書館 03-5211-4289、4290

②来館:千代田図書館 10階 カウンター

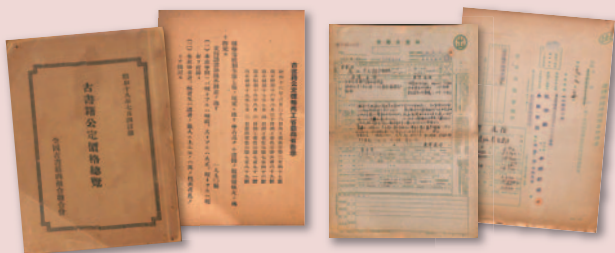
いずれも平日10:00~18:00

受付開始日時 1月10日(水)10:00



特設コーナー「用紙や価格の統制」

「書籍企画届」「書籍用紙特別割当申請書」(個人蔵)や、「古書籍公定価格総覧」(東京古書組合蔵)など、大変珍しい資料を展示します。



東京古書会館

千代田区神田小川町3-22

電話:03-3293-0161
(平日10:00~18:00)

開館日時:月~土
10:00~17:00
(日曜・祝日休館)

内務省委託本とは

1937(昭和12)年頃以降、内務省で検閲業務に用いられた原本の一部が、千代田図書館の前身である東京市立駿河台図書館をはじめとする市立図書館4館に委託されていました。千代田図書館では、これらを「内務省委託本」と呼び、現在約2,300冊が確認されています。当館の所蔵する「内務省委託本」は実際に検閲に使用されたもので、内務省の検閲官が内容をチェックするために引いた赤線・青線、出版の可否についてのコメントなどが残されています。発売頒布禁止となった本は含まれていませんが、当時どのように検閲が行われていたのかを知ることができるという点で、出版史上貴重な資料です。

もっと知りたい方へ 千代田図書館蔵「内務省委託本」に関連する発行物

- 調査レポート(第16号まで発行)
- 内務省委託本を紹介するパンフレット
- 検閲の痕跡(コメントや傍線部分)の画像を収録したDVD(検索機能付)



くわしくは、千代田図書館までお問い合わせください。